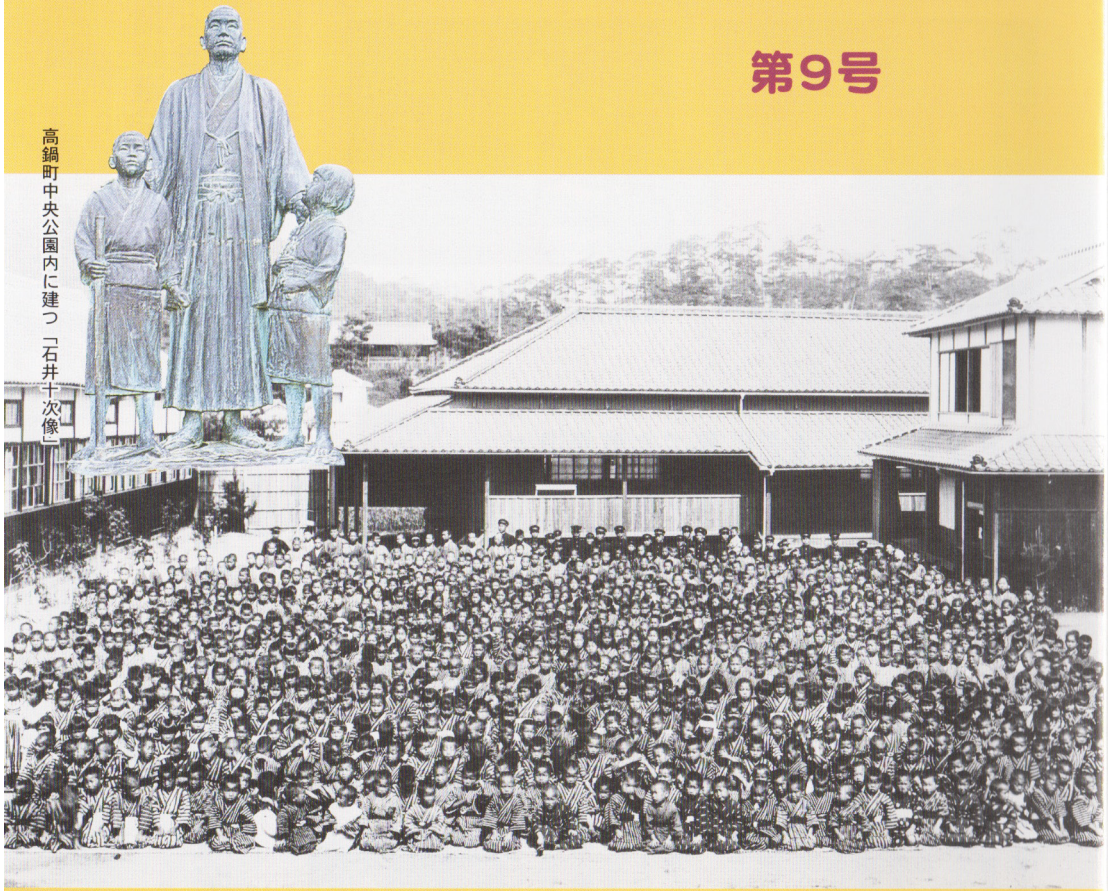
石井十次顕彰会だより

第9号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

財団法人　石井十次顕彰会

道徳授業ビデオ贈呈　尾崎理事長より宇田津教育長へ
平成９年から３ヶ年計画で完成（小１～中３まで各学年１巻）

増田工務店からの寄付金を町長から受ける尾崎理事長

石井十次顕彰講演会　平成11年11月５日　会場　高鍋町立美術館ホール
同志社大学人文科学研究所講演会に多くの町民（約300人）

募金者報告第九号

平成十一年四月一日
平成十二年三月三十一日

篤志寄付

高鍋町　高鍋町郵便局　宮内信秀様
〃　立正佼成会高鍋協会　久保勝代様
〃　増田工務店㈱　増田秀文様
〃　黒岩　健郎様
〃　尾崎　一男様
〃　今村　幸男様
〃　黒木本店㈱　黒木敏之様
延岡市　柳田宏明様
倉敷市　久米利行様
宮崎市　印刷センタークロダ　㈹原田安政様
三股町　桑畑ハツ子様

忌明寄付

高鍋町　高倉美紀子様
〃　金田　佳成様
〃　永友　吉人様
〃　弓削多津子様
〃　池田和一郎様

このたびは、多額のご寄付をいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申しあげます。

あとがき

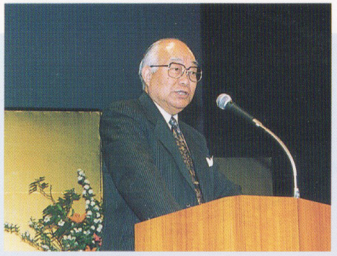
皆様のご協力のもと顕彰事業も年毎に広く深くなって参りました。「石井十次顕彰会だより」も全町民にお届けして以来第9号となりました。ご家族みなさんでごらん下さい。

発行者：石井十次顕彰会
題　字：宮崎県知事　松形祐堯
印　刷：㈲印刷センタークロダ
発行日：平成12年３月31日

石井十次顕彰会だより

第八回 石井十次賞

社会福祉法人　広島修道院へ
平成十一年四月十日石井十次生誕記念式典当日に正賞「楯」と副賞が贈られた。



第８回石井十次賞として社会福祉法人広島修道院が決定したことを報告される選考委員長福田垂穂氏

尾崎理事長より広島修道院河野澄子氏へ賞状が手交された。

石井十次賞受賞のお礼を述べられる広島修道院名誉院長広島乳児院長河野澄子氏

松形知事の祝辞を述べられる県福祉保健部次長兼児童家庭課長上原道子氏

受賞者
社会福祉法人　広島修道院　様

広島修道院理事長
河野義夫氏

創始者、北村藤三郎が、私財を投じて施設創設に踏み切った明治二十二年一月以来、子、孫三代一一〇年にわたり児童福祉に貢献を続けている。

初代北村は一八八五年浅野藩士の家に生れ幼くして儒学を学び、当時凶作が続き貧児が溢れる世相を見て恵まれない子どもの為に、自宅を開放して孤児を収容し教育を始めた。孤児貧児救済事業の基本は「教育」と考えて彼らを感化・教育して良き品性を持った社会人に育てることを天命と考えていた。北村家家訓「清・慎・勤・倹・忍・和」を院訓として、幼い頃より教え諭すことが大切と説き、現在も修道院の教育の柱としている。

二代目北村孝義は、関東大震災の救難作業に当たる中で、父母を求めて泣く孤児を見て父の事業を理解し、父を補佐するために帰広島した。

昭和四年の万国社会事業大会（アメリカ）に日本代表として出席、このときに、乳児院・産院の施設・設備に関心を寄せ、続いて留学し保育を学問的に研究しその成果を社会に還元する事業に一身を捧げた。昭和二十年の原子爆弾は親子二代による県下で唯一の完備した児童収容全施設を焼失させたが、疎開により園児の犠牲者はなかった。戦後の混乱の中で苦労を重ね宿舎の建築にあたり路頭に迷う子たちに愛と光をとの信念で昭和二十二年児童寮を復興し乳児院を設置した。

戦後の日本における社会事業の共同募金制度発足の際に米国留学の体験から意見を述べ大きく貢献した。

昭和二十四年以来、乳児院長を続けている三代目河野澄子は創立百周年にあたり、都市化による養育教育環境の悪化解消と子供をのびのび緑のある地へと移転を決断した。乳児から幼児・学齢期へと養育の一貫性を考えた乳幼児ホームを実現させた。また家庭機能の低下をいち早く察知して相談事業を始め、更に保育事業に取り組み成果をおさめ今日に至っている。

一世紀以上の長きに亘り八〇〇〇名の児童が親元へ社会へと自立し巣立ち初代院長の理念を受け継ぐとともに、時代の要請にこたえ後進育成のために実習施設として貢献している。また後援団体「友の会」の協力（述べ一五七〇〇人）を受け地域に密着した福祉活動を行っている。

石井十次賞選考委員会

「石井十次賞」
正賞の楯

（石井十次の
ブロンズ像と
茶臼原憲法）

選考会で挨拶される
吉本光朗高鍋町長

選考会の様子（全国町村会館）

第3会議室
石井十次賞　選考委員会

平成11年4月10日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。
高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各２校があり隔年毎に交代で行われております。

「思いやりの心」

高鍋町立高鍋西小学校　５年　　松　下　奈　緒

私は、一年生の時、初めて石井十次先生のやさしい心、思いやりの心を知りました。そして、思いやりの心についてたくさんのことを学んできました。

その中で、十次先生が三千人もの孤児を救って育てたことがすごいなあと思いました。私は、このことを初めて知ったとき、「わあ、すごいなあ。私だったら、救って育てることなんて一人ぐらいしかできないよ。」
と、とても感心しました。

わたしたちの学校では、毎年、「石井十次先生をしのぶ会」という行事が行われます。一年生から六年生まで、十次先生のことを思って、意見発表や、げきなどをします。私は、六年生が発表する劇が心に残ります。

「なわの帯」というげきで、祭りの日になわの帯をしめてきた男の子が、他の子にいじめられます。そんなかわいそうな子を見て、石井十次先生は、なわの帯と、自分のお母さんがいっしょうけんめい作ってくれたつむぎの帯とを取りかえました。とても心の広い、思いやりのある人だなあと思いました。もし、私がいじめられている子を見つけたとしても、十次先生みたいに助けることは、たぶんできないと思います。

けれど、思いやりがないと、いじめが起きます。テレビのニュースでは、いじめのせいで自殺をする人が何人もいるということを聞きます。私は、そういうニュースを聞くたび、いやになります。

だから、十次先生みたいに、いじめとかけんかがあったら、助けてあげたり、引き止めてあげたりして、みんなの役に立てるようになりたいと思います。

四年生の時のクラスでは、ひとりぼっちの人や、仲間外れになる人がいなくなるように全員で話し合って、「みんなで遊ぶ日」を、週に２、３回作りました。大なわをしたり、ドッチボールをしたりして、昼休みをすごしました。今では、ひとりぼっちだった人や、仲間に入れなかった人が、自分から話しかけてくれたり、みんなと仲良く話をしていたりして、とても明るくなりました。

私は、あまり遊んだことのない人と遊んで楽しかったので、「これからも、ずっとこんな日が続くようにしよう。」と思いました。

十次先生、私は、十次先生の思いやりの心がみんなにとどくようになってほしいと思っています。私もみんなも、十次先生を見習って、心の広い思いやりのある人になりたいです。

「十次先生を尊敬することによって」

高鍋西中学校　３年　　徳　永　祐　子

宮崎県の偉人である石井十次先生は、私にとって大きな存在となっています。私には、十次先生のように三千人もの孤児を育てるという、大きな事はとてもできませんが、一つだけ心がけていることがあります。それは、礼儀の基本である「あいさつ」です。「なんだ、そんな事か！」と思われるかもしれませんが、私にとっては、相手が返事を返してくれるか、返してくれないかで、私のその日一日が決まってくると思っています。

「大きな声で、明るく、さわやかに、笑顔で」というのが、私のモットーです。今、あいさつを自ら進んでする子どもが何人いるでしょうか。大人でさえ、できない人が多いというこの世の中で……。

私が十次先生を知ったのは、小学校に入学した時からで、学校には、「信・愛・和」という三つの言葉があり、各教室にも十次先生の肖像画が飾ってありました。

十次先生について学んだのは、六年生で行う劇や月別で歌う「石井十次の歌」などからでした。そんな中で私が知ったことは、子どもの時から正義感の強い子で、天神様の秋祭りでは、十次先生の母が忙しい間をぬって作ってくれた「つむぎの帯」と友達の「縄の帯」とを交換してあげたり、あわれな子を救ってあげるために、六年間学んできた医学書やノートを山と積み上げ、焼いてしまったりと、普通の人にはここまではできないことを、一人でやってこられたということでした。

そんな十次先生がいらっしゃったからこそ、生きていけた子どもたちがたくさんいたのだと思います。三千人もの孤児の小さな命を救われた十次先生はとても偉大な方だと思いますが、それと同時に、十次先生を支え続けてこられた幼なじみの品子夫人と、看護婦から十次先生の妻となった辰子夫人も、慈愛に満ちたすてきな女性だと思います。

十次先生のように、人を信じる心、愛する心をもつ美しい人間こそが、真の人間と言えるのだと思います。私は、そんな人になれるよう、私のあいさつで多くの人が気持ちのよい一日を送れるように、これからも毎日のあいさつを心がけていきたいと思います。

The Life Of Juji Ishii

Takanabe-higashi J.H.S
Masataka Kodama

ÅuWhen Juji was young, he was dressed by his mother in a new kimono with a good belt for a feastival.Åv

十次がまだ幼少（６つか７つ）のころである。
秋祭りがきて、十次は、母に新しい着物を着せられ、新しい帯もしめてもらった。

The Life Of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S
Rie Kuroda

「Juji Ishii was born in Babanoharu, Takanabe-town, in Miyazaki prefecture in 1865.」

石井十次は、1865年（慶応元年）、現在の宮崎県高鍋町馬場原に生まれた。

第８回全国ボランティアフェスティバルみやざきにおいて石井十次展開催
全国から4000人の会員、県内から10数万人が集った会場（シーガイア）

石井十次展においでいただいた、清子内親王殿下をお迎えする県民

「石井十次先生に学ぶ」

高鍋高等学校　年　吉　川　彩　子

「予は他の友人より優れて幸福なるが故に、他の予より不幸なる友人を助けざるべからず。」これは、後に孤児の父と呼ばれ、一生涯をかけて多くの孤児の救済に当たった、あの石井十次先生の少年時代の一言です。

この混沌とした現代の中で、この十次先生のような考えを持つ子供がいったいどれだけいるでしょうか。十次先生は母からもらう少しばかりの小遣いを貧しい友人とともに使うのが楽しみでありました。私は、このどこまでも優しく思いやりに満ちあふれる十次先生の心に本当に感動しました。また、この様な十次先生の献身的な生き様は私たちに様々な教訓を与えてくれました。

あらゆる方面で機械化が進み、情報のあふれている現代社会では、どうしても人と人とが直接触れ合って何かをするという機会が減りつつあります。それにともない人が自分以外のものに対して思いやりの心を持つという事も徐々に少なくなっているのではないかと私は思います。

最近では、人として絶対あってはならない毒物に関する事件や殺人事件など、本当に胸が痛くなるようなニュースが耳に入ってきます。またそれは人に対してだけではありません。自然に対しても思いやる心が足りないばかりに、人間はオゾン層破壊や温暖化、森林伐採、砂漠化など、地球規模の環境破壊を次々と広げているのです。数年前まで日本中どこの小川でも見ることができ、童謡「めだかの学校」でも歌われ親しまれてきた「めだか」が、現在では絶滅の危機に瀕し、もう容易には見ることができないのだそうです。本当に悲しいことです。しかし、これは人間が自分たちのことしか考えず、何もかも人間の思い通りに行ってきた結果なのです。そこにもう少し自然を思いやる心があれば・・・そう思わずにいられません。

これから二十一世紀にかけて、こういった問題はますます深刻化していくにちがいありません。国際化や高齢化が進行していく日本では、ますます人間が互いに思いやりの心を持ちながら助け合っていくことが重要視されるでしょう。この様な時代を乗り越えていくためにも、今こそ、次世代を担う私たちが、郷土高鍋が生んだ石井十次先生を誇りとし、十次先生の教えを学び、受け継いでいかなければならないのではないでしょうか。そして、私たちはこれからの日本を思いやりの心で満ちあふれた社会にするために努力していきたいです。

いま、なぜ 石井十次か

(財)石井十次顕彰会理事長　尾﨑　一男

福祉という言葉さえなかった明治時代、「孤児救済」という未開拓の事業に取り組んだ青年がいたのである。岡山孤児院を創設し児童福祉に生涯を捧げた三千人余の孤児を育てた人物、その名を石井十次といい、一八六五年四月十一日高鍋藩の下級武士、石井万吉、乃婦子の長男として生れた。万吉は土木に秀でた人で、各地に農業用の堤をつくり「万吉堤」と評されるほどであった。母、乃婦子は隠徳の人で近隣の困った人々に対し、物心両面に亘って相談にのり、世話をするという心優しい女性であった。十次はこのような心豊かな家庭で、両親の愛情を一身に受け成長していくのであった。

一八八二年十七才の時、高鍋出身の萩原百々平の勧めで岡山甲種医学校に入学し医学に励む日々が続いた。卒業が近づき、医術実施訓練のため岡山市郊外大宮村の大田医師の代診として診療に専念していると、診療所隣にある大師堂で前原ツネ親子三人連れの巡礼とめぐり逢うことになった。一八八七年四月二十日十次二十二才のときのことである。母ツネが申すに、女手一つで二人の子供を育てることは無理なので長男の定二の面倒をみていただけないか、と懇願するのであった。十次は、妻品子と相談し、早速この定一少年を引取り育てることにしたのである。このことが評判になり孤児の数も次第に増えていくので、郷里高鍋の両親の知るところとなり、父万吉は心痛の中、義兄岩村眞鉄を岡山に差し向け「先ず医師になれ、而して孤児の世話をするように」と手紙を托し、諭すのであった。併し孤児の数は増えていくので、岡山市内の廃寺になっていた三友寺を借り受け孤児救済に没頭するのであった。このような状況の中で、医師とならんか、孤児救済かの決断を迫られているとき、聖書に「人は二柱に仕うること能わず」の教えがあることを知り病人を診る医師は他に多くいるが孤児の世話をする者は、自分でなければ他にいないと確信し、六カ年学んだ医書数十冊に石油をかけ火を放ち、焼き捨てたのである。一八八九年一月十日未明、二十三才のときのことである。

明治という時代は、立身出世を夢みるという権力志向の時代であった。従って当時の世情からみると、医師になることが一般的に当然なことで医師を目指せば地位も、名誉も得られる余裕ある生活もできた筈であった。その医業を捨て、福祉事業という、先行きの見えない危険な道を選んだのはなぜか、拙い推測であるが決断時の心境は、修業僧が苦悩の末悟りを得たような境地であり、神のような崇高な人類愛であったと思うのである。一身をかえり見ず孤児救済という難事業に挑んだ勇気と思いやりの心の深さは底しれぬものがあったと思うのである。このように、私欲がなく、神仏のような心で孤児を育てたからこそ、大原孫三郎を始め多くの人々が全面的な信頼を寄せ、協力がありあの大事業をなし得たと思うのである。石井十次が底知れぬ大人物であったかと思われる一つに、孤児院の収容に当たって無制限収容を天下に宣言したことである。(一九〇五年一月十五日)その無制限収容の動機になったであろうと思われることは、明治天皇から一九〇四年六月三十日に十次の善行が認められ、二〇〇〇円の御下賜があり、向う十ケ年毎年一〇〇〇円を御下賜される御沙汰をいただいたことと更に、夢の中で、キリストから無制限収容の暗示を受け、すすめられたからと思うのである。一九〇五年東北地方は冷害により大凶作となりその凶作地帯を視察した十次は、六ケ月余りで八二四名の子供を六回に分けて、孤児院に収容し、その総数は一二〇〇名という実に膨大な数になったのである。

戦後五十年余、零の経済から日本人の英知と努力で世界に類例がないといわれるほどの経済成長をし、いま、不況感の中でも、大部分の国民は、暖衣飽食の生活をしていると思うのである。平成九年の総理府国民生活調査によると、心の豊かさを求める国民が五八・八%、物の豊かさを求めるもの二七・九%ということであるが、現実は国民の期待に反し、心は貧しくなり、自己中心的な行動が増え、自分さえ良ければという、心を失った、勝手主義が増加し、いまわしい暗い事件が跡を絶たない。今こそ、石井十次の愛の心、思いやりの心を求めていくことが一番大切なことと思うのである。十次の思いやりの心の一〇〇〇分の一でも良い、全国に浸透していくならば、明るい住みよい社会になると思うのである。

++++++++++++++++++++++++

尾﨑　一男（おざき　かずお）

大正二年、宮崎県高鍋町生まれ。

法政大学経済学部卒業。

昭和三十一年六月高鍋信用金庫理事長・昭和六十二年五月同会長・平成二年五月同相談役を歴任。

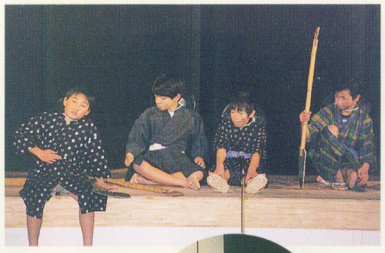
平成二年四月より(財)石井十次顕彰会理事長。

他に、昭和二十六年高鍋町助役・昭和四十六年六月高鍋商工会議所会頭・昭和四十九年十二月座論梅ゴルフカントリークラブ理事長・昭和五十一年十月藍綬褒章・昭和五十九年五月勲五等双光旭日章受章・平成十一年十月高鍋町名誉町民。

第10回 石井十次顕彰のつどい

児童劇「岡山の大洪水」

平成十二年二月五日



第18回 石井十次生誕記念式典

平成十一年四月十日

町民代表として献花をされる
古屋正大氏

英訳石井十次物語を受けとる
中学２年生代表
（高鍋東中・高鍋西中・木城中・穂北中）

石井十次小伝を受けとる
小学校５年生代表
（高鍋東小・高鍋西小・木城小・
石河内小・茶臼原小・穂北小）

児童福祉につくした人

このころ、生活に苦しむ人々のなかには、子どもを養えなくなる親もありました。しかし、政府の対策は不十分で、社会福祉も民間の慈善事業が中心でした。宮崎県出身の石井十次は、こうした子どもの救済に生涯をささげました。岡山で始まったかれの活動は、支援者を得ながら広がり、孤児や天災にあった子どもたちを全国から引きとり、その数は多いときには1,200名に達しました。かれは、宮崎の茶臼原原野に施設を移し子どもたちとともに開拓を行いながら、その教育に努めました。

・中学校社会科の歴史教科書に掲載（平成９年４月）
・全国4,500校の中学生が石井十次を学び始めた

石井十次道徳授業西中学校３年